

北九州市の子育て支援環境と保育所の支援

－ 保育所における地域子育て支援活動の内容と方法 I －

○木山徹哉（九州女子短期大学） 太田光洋（九州女子短期大学）

片山順子（九州女子短期大学） 小方圭子（宗像市赤間保育園）

1. 本研究の目的

周知のように、我が国では少子化や仕事と子育ての両立困難、子育ての孤立化、児童虐待の増加、凶悪な少年犯罪の増加などの課題に対応し、いわゆるエンゼルプラン（1994年）や緊急保育対策等5か年事業（同年）、さらに新エンゼルプラン（1999年）を策定して子育て支援対策を推進してきている。すでに子育て支援活動は一般化してきていると言われている。現実には、北九州市においても、少子社会対策推進計画の策定とその部門別計画としての「新保育5ヵ年プラン」の策定を一つの契機として、さまざまな子育て支援活動が行なわれてきている。

北九州市は、平成11年4月少子化対策推進本部の設置以降、「市民の皆さんの意見を聞く会」（同年4月～7月）の実施、北九州方式の少子化対策（原案）作成（同年11月）、「少子社会懇談会」開催（同年11月～平成12年7月まで計8回開催）など、一連の計画策定経緯ののち、少子社会対策推進計画を策定した。少子社会対策推進計画の詳細については、すでに平成12年11月に「北九州少子社会対策推進計画（新子どもプラン）」として同市保健福祉局総務部計画課発行で公表されているので参照されたい。推進計画の基本的構成は、「子どもの成長」と「子育て」を地域で支え合うまちづくりを目標に掲げ、その実現のため「あんしんシステム」（子育て支援のネットワークづくり）、「すくすくシステム」（子育て支援環境の整備）、「のびのびシステム」（子どもの視点からのまちづくり）という「3つのシステム」の充実・整備をすることとなっている。

本研究は、この基本構成で言えば、「すくすくシステム」の一つの柱として設定されている「3. 家庭での子育てを支援する環境づくり」のなかの基本的視点、「子育て家庭への支援の充実」「子育て支援に関する情報提供の充実」に直接かかわる、保育所における地域子育て支援について、その具体的活動内容を明らかにするとともに、各保育所における支援活動の特色、問題点、課題等を検討して、今後の北九州市における子育て支援事業の方向性と可能性を

探ることを目的としている。

2. 研究の方法

本研究は、私立大学教育研究高度化推進特別補助の対象となる共同研究である。したがって、本学の保育者養成にかかわる教育および研究の発展に資するものである。

本研究は、子育て支援事業に関して、北九州市の児童家庭課、保育課への聞き取りおよび資料の収集、拠点保育所の各担当者、園長等への聞き取り、並びに子育て支援活動の具体的場面の記録や考察、さらにわれわれが行なった調査・分析結果の各保育所へのフィードバックとその対応の検討、といった方法を採用した。なお、拠点保育所は、現在北九州市では7カ所（各区1カ所）設置されており、その内、公設公営1、公設民営1、民設民営5である。平成17年には14カ所（各区2カ所程度）に拡充する目標で計画が進められている。

3. 結果と考察

1) 公設公営の保育所

若松コスモス保育所は、現在設置されている拠点保育所の中では、唯一公設公営の保育所である。ここでの地域子育て支援センター事業は、育児不安等についての相談指導、子育て家庭・子育てサークル等の支援、特別保育事業の積極的実施、その他の関連機関との連携、地域全体の交流、の大きく5つから構成されている。

この保育所では、育児講座等いわゆるイベント的な支援活動も年間に各数回ずつ実施しているが、平成14年度にはたとえば育児講座は参加者数が少ない（地域；子ども13、大人10、保育所；子ども8、大人10、計41）。保育所長及び子育て支援センター担当の主査によれば、イベント的な活動も子育てに関する情報発信や啓発活動として重要であるが、今後の課題として、「親子がいつでも気軽に訪れることのできる環境」をつくり、その中で、「本当に支援の必要な親子への援助」の内容や方法を模索したい、という。なぜならば、イベント的な活動への参加者はいわゆる「固定客」もしくは「渡り歩き」の傾向

があり、出歩ける母親よりもむしろなかなか表に出ることを躊躇する、集団に入れない母親をどう把握して支援するか、このことを本来の地域子育て支援と捉えているからである。そのための試みとして、「おひさまルーム」と呼ばれる「親子で好きな遊びを楽しむフリースペース」を園内に設け、子ども同士、親同士、和やかな関わりができるような雰囲気づくりを心がけている。平成 14 年度年間延べ 420 人の親子が利用したと報告されている。「おひさまルーム」には、育児サークルなどの集団になじめない親子が訪れ、「子どものペースで好きな玩具で遊ぶ姿への親の穏やかな眼差し」に子育て支援担当保育士もこのルームの意義を感じた、と記している。

2) 公設民営の保育所

八幡東さくら保育所は、北九州保育 5 か年計画に沿って新たに統合整備された多機能な保育所である。この保育所は、前田市民福祉センター（北九州市内各小学校区単位に整備される市民福祉センター）と同じ建物内にあり、「前田ふれあいセンター」（市民福祉センター・保育所の複合施設）の 1, 2 階が保育所、3 階が市民福祉センターになっている。この拠点保育所の地域子育て支援センター事業もさきの若松コスモス保育所とメニューとしてはほとんど違くない。しかし、次の 2 つの点は特徴として挙げることができる。第一は、前述の「複合施設」ゆえの特徴である。すなわち市民福祉センターがあることによって、地域の交流が盛んに行なわれる環境が提供されているということである。つまり、保育所が行なおうとしている地域子育て支援事業は、まず何をやっているか知ってもらうことが重要であり、気軽に訪れる雰囲気づくりが大切であろう。その点、この複合施設はそれを保障しているように思われる。また、子育て支援事業に関わるイベント的な活動が市民福祉センターとの共催で実施できる。このことは第二の特徴を保障するものでもある。すなわち、八幡東さくら保育所における地域子育て支援事業の理念的、空間的核として位置づくであろう「さくらキッズルーム」の試みである。このルームは、幼稚園や保育所に通っていない親子を対象に遊びの場を開放して、年齢にあわせた玩具・玩具をそろえ、専門スタッフが親子の遊びをサポートする目的で設けられている。スペース的にもかなり余裕があり、開館も毎週火～金曜日（午前 10 時～12 時）と多い。そのため、他の区からも車で訪れる親子も多く、このルームには毎日 30 組前後（多いときは 40 組）が

訪れる。

さて、これら拠点保育所の地域子育て支援事業の経験交流あるいは各機関の連携等については、どのような現状と課題があるか。

まず、拠点保育所が担当する区レベルにおける経験交流等はどうかだろうか。たとえば若松区では「若松区子育て支援交流会」があり、平成 14 年度は 4 回開催されている。参加者は保育所長、幼稚園長、主任児童委員、保健師、相談委員、育児サークル代表者など毎回 20 人前後であり、各参加者から活動状況報告および意見交換などが行なわれている。

ところが、拠点保育所間の経験交流についてはなかなか難しく、相互の見学が行なわれている程度が現状のようである。また、行政サイドにおいても、児童家庭課、保育課、教育委員会相互の連絡や、それぞれが管轄する子育て支援の経験や課題を行政レベルでどのように総合し、全体政策へと反映させていくのか現在のところ見えにくいと言わざるを得ない。

4. 今後の課題

既述のように、北九州市においては、子育て支援は「少子社会対策推進計画」施策のひとつとして位置づけている。この点については、「少子化と子育て支援とは理念としても事実としても別の問題」（鈴木）という捉え方は重要である。

子育て支援とは、対親ということ言えば、子育てに関する不安や悩みを共有し、子育ての知識・技術を学び伝え合う、いわば文化伝達の活動である。したがって長期にわたって日常的に継続していく活動と捉え実践する必要がある。ところが、少子化対策として行政的に位置づけられ、一定の期限付きの目標値が設定されたとき、ややもするとその結果（つまり、いっこうに少子化に歯止めがかからない）によって子育て支援事業も性急に批判されることになる。しかし、保育所における地域子育て支援に直接かかわる保育士は、一方で、子育てに関する啓発や情報発信として各種のイベント的活動を行ないつつ、前述の「おひさまルーム」や「キッズルーム」の試みに表現されるように、日常的に親子が気軽に訪れるフリースペースでのふれあいを、文化伝達の場と契機にしようという理念と努力が伺われる。そのような活動の深まりと、その展開過程における保育所の機能や保育士の専門性の変化も視野に入れて、今後も調査・検討を進めていきたい。